「対照言語学若手の会」シンポジウム　発表申込書

**発表題目**：日本語から見たヒンディー語の関係節―いわゆる「外の関係」を中心に―

**発表要旨**：

本発表では日本語とヒンディー語の関係節（名詞修飾節）のうち、主名詞と修飾節の間に格関係が成立しない、いわゆる「外の関係」（例：［さんまを焼く］匂い）の関係節を対照する。

(1) 寺村（1992: 202）による関係節の類型

- 内の関係＝付加的修飾
- 外の関係＝内容補充的修飾
  - ふつうの内容補充
  - 相対的補充

（※Keenan & Comrie（1977）で扱われている関係節は概ね「内の関係」に相当する）

日本語ではどのような種類の関係節も単一の構造（修飾節前置型）で表され、関係節であることを示す標識や、主名詞と修飾節の関係標示もない。一方、ヒンディー語には関係詞を用いた関係節（修飾節後置型）のほか、複数の関係節構造があり、「外の関係」は不定詞を用いた関係節（修飾節前置型）で表される（次例(2)）。

(2) a. [machliyãã tal-ne=kii] gandh
魚.F.PL 揚げる-INF.OBL=GEN.F 匂い.F.SG
「魚を揚げる匂い」（HJD0319R）

b. [aag phail-ne=kaa] xatraa
火事.F.SG 広がる-INF.OBL=GEN.M.SG 心配.M.SG
「火事が広がる心配」（HJD0905L）

ヒンディー語では日本語のように動詞の定形が主名詞を修飾することができず、不定詞が属格後置詞 kaa を伴って主名詞を修飾する（この構造では属格後置詞 kaa が中国語の「的」のように一種の関係節標識になっている）。

「外の関係」では主名詞になる名詞は限られており、寺村（1992）はその種類（意味的特性）によって、①発話・思考の名詞（例：「言葉」「噂」「考え」）、②「コト」を表す名詞（例：「事実」「習慣」「方法」）、③感覚の名詞（例：「音」「匂い」「気配」）、④「相対性」の名詞（例：「上」「翌日」「理由」）に下位分類している（①～③は上記(1)の「ふつうの内容補充」、④は「相対的補充」に当たる）。

ヒンディー語の用例分析とインフォーマント調査の結果、①～③の「ふつうの内容補充」はヒンディー語でも関係節化できることがわかった（上例(2)、次例(3)）。しかし、④の「相対的補充」は「前／後」などの時間的な前後関係や「原因／結果」などの因果関係を表す名詞は関係節化できるが（下例(4)）、「上／横」などの空間的な関係を表す名詞は関係節化できない。

(3) [us=se chuTkaaraa paa-ne=kaa] upaay
3SG.OBL=ABL 逃れる-INF.OBL=GEN.M.SG 方法.M.SG
「それから逃れる方法」（HJD0141L）

(4) [buxaar=ke phail-ne=kii] vajhõ=kii jããc
熱.M=GEN.M.OBL 広がる-INF.OBL=GEN.F 理由.F.PL.OBL=GEN.F 調査.F.SG
「デング熱が広がっている理由の調査」（BBC061002）

ヒンディー語の複数の関係節構造の使い分けおよび日本語の関係節との対照に関する先行研究はほとんどなく、本発表の知見は言語類型論的にも有益である。

**主要参考文献**：


Comrie, Bernard (1989) *Language Universals and Linguistic Typology*. Second edition. Chicago: The University of Chicago Press.

西岡美樹（2005）「ヒンディー語のいわゆる名詞句について－属格後置詞‘kā’を中心に」『京都産業大学論集』33

大関浩美（2008）『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版.

寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ』日本語文法編．くろしお出版.